「もっと政治に怒るべきです。なぜ動かないのかと」

フロントランナー Front Runner

（b1面から続く）

山口 スティーブさん　トラベル東北社長

――ボランティアのツアー先は、なぜ牡鹿半島なのですか。

旧牡鹿町は2005年に石巻市に統合されました。震災と津波で大きな被害を受けたのですが、行政は市街地だけで手いっぱい。最も近い新幹線の駅からでも車で2時間ほどかかり、域内の宿泊施設も壊れてしまったので、ボランティアがなかなか入らない。一方で首都圏には誰かを助けたいという気持ちを持つ人があふれている。旅行業者の自分なら、両者を結びつけられると思いました。

――実現には苦労もあったようですね。

肝心のボランティア先がなかなか決まらなかった。現地にもボランティアセンターはあって、若い人たち中心に頑張ってはいるのですが、一人で連絡用の携帯を6、7台も持たされていたりして、圧倒的に人手が足りない。周りはがれきの山なのに、です。

幸い、宿泊テントを張る場所を無償で提供してくれた酪農家に相談すると、すぐに「手を借りたい」という被災者の方を見つけてくれました。ほかにも、決断ひとつなのに行政が平時の手続きや規制にこだわり、変更や断念を余儀なくされたことがありました。

震災後、役所に登録した認可団体のもとでしかボランティアを受け付けないという報道がたくさんなされた。もちろん交通整理は必要ですが、見ていると自分たちの領域に踏み込まれて問題点を見つけられるのが嫌な役所の方便に使われている面が多々ある。こうした意識が、ボランティアの動きを押しとどめ、復旧の大きな妨げになっている現実を、もっと注視すべきです。

旅館も被災したので、ツアーはテント泊。お客さんとカレーをかきこむ＝宮城県石巻市

――中央は、政府も国会も、被災地そっちのけで混乱しています。

ツアーのお客さんたちは「一日休戦し、議員全員で被災地に来て、汚泥の臭いをかぎながら一日ボランティアしたらいい」と言っていましたよ。頭を冷やせるだろうって。

受け身ではダメ

――東北人は我慢強いですね。

私は、それが悪い方に発揮されていると思う。もっとみんな、政治や行政に対して怒るべきです。「なぜ自分たちの都合優先なのか」「なぜ動かないのか」と。一方で、被災地は復旧目当ての利権争いや談合、詐欺まがいの行為が始まっています。誰を信用していいのか。無力感と緊張感とで、立ち往生しているのです。

――強いリーダーが必要だと。

成熟した民主主義の国では、「決めた目標にたどり着くのを助けられる人」がリーダーになる。状況判断のための情報と手段を結集できる人。ただし、根本の目標を決めるのは、私たちです。

同じ東北人として気になるのは「誰かがやってくれる」と受け身になってはいないか、ということ。港や商店街、学校をどうするか――自分たちでとことん話し合い、納得した結論に沿って動くしかない。そうなれば一人ひとりに責任感が生まれ、力も出ます。強いリーダーは、強いフォロワーなくして生まれません。

――でも、「頑張る」という言葉が好きじゃないとか。

日本語の「頑張る」は、「押しつけられた課題に耐えぬく」という悲壮感がにじむでしょ。たとえば受験制度。日本の受験制度は本当におかしい。でも、しかたがない、自分では変えられない、「頑張る」しかない――。そのぶん「結果がともなわなくてもいい」という甘えもにじむ。

本来の「頑張る」は、自分がやりたい目標に向かうこと。夢に近づく行動だから、楽しくてしかたない。私は高校時代、辞書を食べちゃうぐらいドイツ語を勉強しましたが、ちっとも苦痛じゃなかった。上達したら留学させてくれると父が約束してくれた。目標が明確だったからです。自分の人生、どうして我慢するのですか。失敗してもいい。押しつけられた道ではなく、自身で選んだ道を楽しく歩きましょうよ。

――米国に戻りたいとは思いませんか。

いいえ。宿の各部屋に、そっと一輪の花が添えてある。そんな、他者への細やかな心遣い。簡単なことでも「道」を極めようとする職人気質。すばらしいです。料理でも、一つひとつの皿にまでこだわる。9割はバイトがマニュアル見て作れるような料理しかない国とは大違いです。

山城の復元が夢

――時にはストレスもたまるでしょう。

小国城跡の下草刈りに行きます。最上町に残る東北有数の山城です。長らく生い茂った草木の下で眠っていたんですが、復元作業を急いでいます。350㍍ほどの小山全体を使った戦国時代の要塞で、堀切や馬返しの跡など、戦争の絶えなかった時代に必死に生き延びるための思いが随所に刻み込まれている。私の夢は、ここで地元の若者とお客さんがともに参加する「戦」イベントを開くこと。

――奥の細道を歩くツアーもすぐですね。

7月2～3日、芭蕉が泊まったという「封人の家」を出発し、山刀伐峠の頂上を目指します。古い地図や年配者の話をもとに、当時の足跡をたどります。私も案内人を務めます。江戸の昔と同じ鳥たちの鳴き声が迎えてくれますよ。

プロフィル

★1960年生まれ。米カンザス州出身。学者の父と彫刻家の母のもと、公民権運動やベトナム反戦運動、ヒッピー文化などに囲まれて育つ。

★高校時にオーストリアへ留学。オクラホマ州立大学を卒業後、スタンフォード大大学院へ。D・オキモト教授に師事し、教授の薦めで東大大学院に留学。自民党政治を研究。

★87年、三菱商事入社。化学分野の担当で各国を飛び回る。当時の上司、武市純雄さんは「行動力の人。倫理観がしっかりしているから、途中でぶれることがない」と振り返る。

★94年、結婚を機に日本国籍を取得。義父の他界後、山口建設社長に。写真は2002年、国道工事を受注した際の記念撮影。一男一女。

★2007年からトラベル東北社長。地元・最上町役場交流促進課の伊藤和久さんは「やんばい（適当）を許さない頑固さもあるが、その真剣さに心うたれ、皆、仲間になっていく」。

★大の歴史好き。出先で石碑や墓碑を見つけると確認せずにはいられない。戦国時代の出羽山形藩当主、最上義光の話になると止まらない。

◆次回は、伝統的な日本酒の製法を守りつつ、海外に積極的に売り込んでいる福島県の大七酒造社長、太田英晴さんの予定です。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。